

オピニオン
My opinion

ちがうままで、ひらく花もある。 ——特別支援教育と、 わたしの協道人生

かなもりけい た
金森啓太

岩手県立療育センター小児科

「みんなと同じ」じゃなきゃダメですか？」

今回の特集のテーマは「特別支援教育」——この問いは子どもたちに向けられたものでもありますが、私自身への問いでもあります。

私は、よくいえば“自由”，悪くいえば“変”な小児科医です。毎日の臨床業務に加えて、空いた時間があれば研究をし、ブログやSNSで情報発信をし、医療記事を書いたり、本を執筆したり……。医局にも属さず，“王道の医師”からは外れた道を歩いています。たまに「変わってますね」といわれますが、私はほめ言葉として受け取っています。

子育てにも、がつつきかわってきました。長女が生まれたときは、数か月単位で育休をとり、オムツ替えも離乳食作りも寝かしつけも、全力で取り組みました。職場復帰後も、15時に仕事を切り上げる短縮勤務を1年半にわたって続け、娘のお風呂や家族の夕食づくり、絵本や遊びの時間を何より優先してきました。2025年度にはありがたいことに次女にも恵まれ、同じように育児休業制度を利用し、家族とのかけがえのない時間を満喫しています。

仕事も研究も執筆も大好きですが、それ以上に大切にしたいのが、妻と子どもたちとの時間です。就業後や休日には、何よりも優先して家族と過ごすようにしています。

もちろん、迷うこともありました。「好きなことばかりしていいのか?」「周りに迷惑をかけていないか?」——そんな不安が頭をよぎることもありました。でも、誰かと同じでなければいけない理由なんて、どこにも

ないんですよね。

小児科外来では、発達や行動に個性のある子どもたちと向きあう機会がたくさんあります。「集団行動が苦手」「落ち着きがない」「こだわりが強い」——そうした特性があると、“困った子”というレッテルが貼られてしまうこともあります。

でも私は思うのです。問題なのは子どもたちではなく、「みんなと同じであること」が求められる社会のほうではないかと。

私の娘たちもこれからどんどん大きくなり、保育園や学校での集団生活に挑戦していくことでしょう。いまでも一緒に過ごすなかで、あらためて思うのです——この子がこの子のままで、どこにいても安心して過ごせる場所があったら、それがいちばんだなと。少しくらい人と違っていても、臆病でも、人とかかわるのが苦手でも、食べるのがゆっくりでも、そのまま受け止めてもらえる場所。

そういう“安心”が、成長の土台になるのだと感じています。

「特別支援教育」は、まさにそんな役割を担う場だと思います。“違いを問題にしないで支える”という、やさしいしくみ。そこには、“できる子”にあわせるのではなく、“それぞれの子”を受け止めようとするまなざしがあります。誰かがあわせるのではなく、みんなが「違うまま」でいられる空間——私は、それこそが教育の希望だと思っています。

私自身も、家庭や職場、大学院、SNSなど、いろんな場所で「ちょっと（だいぶ?）変わっている自分」を支えてもらいながら、なんとかやっています。世の中に人生の“王道”があるのなら、私は“協道”もあることを伝える係なんだと思っています。

“王道”を歩くのに疲れたら、ちょっと“協道”，行ってみませんか？

思ったよりも楽しいこと、たくさんありますよ。

私は、子どもたちにも、大人たちにも、こう伝えたいのです。

「みんなと同じ」じゃなくていい。

むしろ「ちがうこと」は、あなたの武器になる。

そのままで、きっと大丈夫。

著者プロフィール 岩手県立療育センター 小児科医長。東京都の小児専門病院で研鑽を積み、現在は地元・岩手県で重症心身障害児や神経発達症を専門に診療。Xやブログ「かなけい小児科ブログ」で、子育て世代に向けた情報発信も行っている。小児科専門医/小児神経専門医/てんかん専門医/頭痛専門医/BLS・PALS インストラクター。